
君と約束

あららぎ慎駒

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

君と約束

【コード】

N4155B

【作者名】

あららぎ慎駒

【あらすじ】

楽しみにしていた、彼女と過ごす連休を。なのにそれは、最悪の日に変わりそうだ。

「あの、ごめん。今度の連休、仕事入っちゃったんだ。ミスがあつて修正に時間かかりそうなんだよ。せつかく予定してたのに…ホントごめん。」

「そっかあ、残念だけど仕方ないよね。」

「ごめんと何度も繰り返す僕に、彼女は気にしなくていいよ、と笑顔を見せてくれた。」

「3日とも仕事？」

「たぶん。」

「夕飯作りにこようか？どうせコンビニ弁当なんでしょ？休み無しで仕事して、帰ってからまともなご飯食べなかつたらすぐにバテちゃうよ。」

彼女の心遣いは嬉しかった。

そのまま僕は、彼女の言葉に頷けばよかったんだ。それなのに素直に甘えられない自分がいた。

「いいよ、わざわざ来てもらうなんて、これ以上迷惑かけれないし。」

「全然迷惑なんかじゃないよ。私が見たいから来るの。」

彼女は机越しに身を乗り出して、僕の顔を覗き込んだ。その小さな顔に大きく、ダメ？と書かれているのがはつきりとわかった。

「第一、いつ帰れるかもわからないんだから…遅くもなるだろうし。」

「じゃあ、待つてる。」

「そこまでする必要無いよ。ちょっと休みが無くなっただくらいで、すぐにバテたりなんか絶対しない。」

僕なりにいろいろと考えて話していたのに、どうも全くの逆効果だったらしい。僕が話せば話すほど、彼女はうつむいてしまう。どうしていいのかわからない。気まずい雰囲気だけが部屋中を満たして

いた。

「コーヒーでも入れてこようか？」

少し気分が落ち着けば、と思つて発した苦し紛れの言葉も、また空回りしたあげくに……彼女に最後の一撃を与えただけだった。

「バカッ!!!」

その言葉を合図に、クッションや枕、その他彼女の手元にあつたものが次々と投げ付けられた。僕はそれら全てを全身で受け止めた。そうしかできなかった。

投げるものが無くなると、彼女は目に涙を浮かべて勢いよく立ち上がり、

何も言わず部屋を飛び出して行った。

あれから五日……彼女からのメールも電話もない。

なぜ、あんなことになつてしまったのか未だに解らないままだ。今日がその連休の始まりなのに。一人で考えても何もわからない。人に相談することでもないし、答えは彼女しか知らない……。

仕事帰り、駅まで歩きながら、まだ、答えを見つけないために考え続けていた。自分なりのなつとくできる答えを見つけない限り、何も変わらない気がしたから。

このまま終わってしまうのは怖い……。

あの日の事を思い出しながら、電車の中でも考え続けた。20分ほど考えると、一つの答え……結論に達した。

彼女のあの時の心情を考える事は出来ても、それはあくまで想像でしかないのだ。これだけ考えても答えは出せなかった。今僕は想像を膨らませるよりも、思い切つて彼女と話をすべきなのかもしれない。そんな勇気も無いけれど……。

上着のポケットから、使い慣れた携帯電話を取り出し、時計だけ見て強くそれを握った。

電話もメールも簡単なはずの事が、今は何よりも難しい。

立ち止まって、進み続ける時計をじつと見ていた。
少しすると、急に辺りがうるさくなった。……雨だ。

予想外の強い降りに僕は慌てて走り出した。携帯電話を握ったまま、何も考えずに、ただ家に向かい走っていた。

アパートに飛び込み、息を整えながら、携帯電話のサブディスプレイで再度時計を見る。

しかし、時計よりも着信があつた事を知らせるメッセージの方が先に目に入った。

彼女からだつた。

息を切らしたまま電話をする気にもならないし、増してや自分からかけ直す勇氣もない。

もう終わりだ……そんな気分だつた。気付かなかつたとはいえ、五日ぶりの彼女からの電話を無視したのだから。

溜め息をつきながら、とぼとぼ階段を昇つた。

「雨…降つてたんだ……。電話、気付かなかつた？」

それは突然の事だつた。

聞き慣れた声……少し緊張して掠れているようにも聞こえるけれど、紛れも無く彼女の声そのものだ。どうして彼女が僕の部屋の前に居るのか解らなかつた。もしかして、終わりを告げるために？それとも……？

「約束、」

「約束……？」

不意に僕は聞き返していた。

僕は何を約束した？とどんどん解らないことが増えていく……。

「ご飯作りに来るって、私、言ったよね？まともなご飯食べなかつたら、体壊しちゃうからって……。」

情けなかつた、僕自身が。社会に出て一人前になつたつもりでいた僕が、年下の、まだ学生の彼女に心配ばかりかけていた。

僕が逃げていた事にも、彼女は真正面から立ち向かっているんだ。こんなまっすぐで力強い彼女に僕は惚れたんだろうな。ふとそんな

事を考えていた。

「ごめん……何にもわかってあげられなくて。」

「今はちゃんとわかってるの？なんで怒ったのか……。」

「……ずっと考えてた……でも、わからなかった……。」

「やっぱり、そうだと思った。私は来たかったから来たんだよ、今も。迷惑ならもう来ない。でも、そうじゃないなら来てもいいでしょ？私、あなたのために出来ること少ないし……だからこそ、少しでもやれることはやりたい。……やっぱり……迷惑……？」

僕はゆっくりと首を横に振った。迷惑なはずが無い。

「ありがとう。」

その言葉に彼女は、温かな笑みを返してくれた。五日ぶりにほっとした気分で充たされている。体の中の邪魔なモヤモヤ感が一瞬にして消えていくのがわかる。

「あ……ベタベタだよな？早く着替えないと風邪ひいちゃう。」

いつもの優しい彼女が、今、僕の目の前にいること……たったそれだけの事なのに、誰よりも僕は幸せものなのだ、とあってしまう。本当にありがとう。

部屋に入ってすぐ、僕は彼女に触れるだけのキスをした。

(後書き)

日常の中にある幸せを書いてみたつもりなのですが、いかがでしたでしょうか？しっかり者で素直な彼女と新米社会人の僕、私の理想が反映されてる気もします。

まだまだ小説初心者なので、頑張っていきます。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4155b/>

君と約束

2008年11月7日08時00分発行